

【旧約聖書日課】申命記 30章11～15節

¹¹わたしが今日あなたに命じるこの戒めは難しすぎるものでもなく、遠く及ばぬものでもない。¹²それは天にあるものではないから、「だれかが天に昇り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。¹³海のかなたにあるものでもないから、「だれかが海のかなたに渡り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。¹⁴御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる。¹⁵見よ、わたしは今日、命と幸い、死と災いをあなたの前に置く。

【使徒書日課】ペトロの手紙一 1章3～12節

³わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように。神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、⁴また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者としてくださいました。⁵あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。⁶それゆえ、あなたがたは、心から喜んでいのです。今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが、⁷あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊くて、イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れをもたらすのです。⁸あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。⁹それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。¹⁰この救いについては、あなたがたに与えられる恵みのことをあらかじめ語った預言者たちも、探求し、注意深く調べました。¹¹預言者たちは、自分たちの内におられるキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く光栄についてあらかじめ証しされた際、それがだれを、あるいは、どの時期を指すのか調べたのです。¹²彼らは、それらのことが、自分たちのためではなく、あなたがたのためであるとの啓示を受けました。それらのことは、天から遣わされた聖霊に導かれて福音をあなたがたに告げ知らせた人たちが、今、あなたがたに告げ知らせており、天使たちも見て確かめたいと願っているものなのです。

【福音書日課】マルコによる福音書 1章21～28節

21一行はカファルナウムに着いた。イエスは、安息日に会堂に入って教え始められた。22人々はその教えに非常に驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。23そのとき、この会堂に汚れた霊に取りつかれた男がいて叫んだ。24「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」25イエスが、「黙れ。この人から出て行け」とお叱りになると、26汚れた霊はその人にけいれんを起こさせ、大声をあげて出て行った。27人々は皆驚いて、論じ合った。「これはいったいどういうことなのだ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く。」28イエスの評判は、たちまちガリラヤ地方の隅々にまで広まった。

安息日に会堂で…【こども説教のために】

感染症の話題がニュースにならない日が始まってから二年になろうとしています。世の中では活動を控えるよう呼びかける声も聞かれますが、教会は、安全対策を講じながら、活動を続けています。何と言っても、教会は、わたしたちが「集まり」を続けることにこそ、大きな存在理由があるからです。

主イエスは、宣教活動を始められるとすぐに、弟子たちを選び出され、旅に伴われました。最初に弟子となったシモンとアンデレ兄弟の家に世話になりながら、彼らと寝食を共にして四六時中、一緒にいることにされたのです。また、ご自分の選ばれた弟子たちと共に居られるだけではなく、さまざまな人と共にいることを進んで為されたようです。

わたしたちは、家と仕事場や学校などを往復しているだけでは、いつも決まった人としか会うことがありません。主イエスは、多くの人と出会うために、一つのことを大切にされていました。安息日に会堂で行われる礼拝に参加することです。ユダヤ人ならば、安息日には会堂の礼拝に集まることが当たり前でした。どの町に行っても、安息日に会堂に行けば、その町に住む多くの人と会うことができたのです。

そこで出会う人を選ぶことはできません。いいえ、安息日の会堂に行けば、「汚れた霊に取りつかれた男」にさえ会うことができたのです。

主イエスの弟子たちは、安息日の会堂を「日曜日の教会」として受け継ぎました。ここで、わたしたちは、いろいろな人と出会います。普段の生活では会うことがないような人とも出会います。むしろ、そういう人と出会うようにと、主イエスが「日曜日の教会」を始めてくださったのです。始めてくださるだけでなく、今も、「日曜日の教会」ですべての人と出会ってくださっているのです。

「かまわないでくれ」

二年前の春、教会は三か月間、「集まり」を止めました。それでも、ここで奉仕者による礼拝の営みを続け、インターネットを介してそれぞれの自宅に留まっていた皆さんが「日曜日の教会」へと集まって来られるようにとしてきました。今でも、日曜日には、実際に会堂においでくださる方と、インターネットを介して加わってくださる方が、おおよそ半々です。

皆さんの中には、日曜日に会堂まで足を運ばれることを何よりも大切にされている方もいらっしゃいます。一方で、オンラインの礼拝があることで、以前よりも礼拝に与る機会が増えたという方もいらっしゃいます。中には、オンライン礼拝のほうが、余計なことに煩わされずに礼拝に集中できるとお考えになる方もあるかもしれません。

このような礼拝の営み方を、主イエスであればどうご覧になられるだろうか、考えないではられません。肯定してくださるのだろうか。それとも、どこか注文を付けられるところがおありだろうか。

主イエスは、洗礼者ヨハネから洗礼を受けられました。荒れ野で宣教活動を始め、ヨルダン川で人々に洗礼を授けていたヨハネの教えの幾ばくかを、主イエスは受け継がれたのでしょうか。けれども主イエスは、ヨハネのように宣教活動をしたわけではありません。荒れ野に留まって、人々がそこにやってくるのを待たれる、ということはなさいませんでした。ヨルダン川にまでくる人たちだけを、ご自身の弟子とされたのではありませんでした。主イエスは、ご自身でガリラヤ湖の畔を歩かれて弟子を選び伴われました。安息日には、普通の生活をしている人々が集まっているはずの会堂に行かれて、皆と同じ礼拝に加わられました。そこには、悔い改めもせず、神のことよりも自分のことを優先させる普通の人々がいることを、ご存じだったのでしょうか。

神のことよりも自分のこと。他人のことよりも自分や身内のこと。わたしたちの心の内奥には、そういう傾向が、誰にでもあります。そのことに自覚的な者もいれば、そうでない者もあるでしょう。それは、信仰者であっても、日曜日の礼拝に加わる者であっても、同じなのです。

主イエスが安息日の会堂で出会われたという「汚れた霊に取りつかれた男」のことは、少しも具体的なことが伝えられていません。もしかすると、それは、ある特定の一人のことではないのかもしれませんが。それは、「あなたは、わたしと何か関係があるか。わたしのことは構わないでくれ」と内心で思うことのあるすべての者のことなのではないでしょうか。

確かにわたしたちは、誰とも関わりたくないときがあるのです。神の御前に進み出ているようで、実のところ、神とさえ向き合うことなく、自分のことばかりに囚われてしまっていることさえ、あるのではないのでしょうか。

汚れたままではない！

主イエスがいらした安息日の会堂で、**汚れた霊に取りつかれた男**は叫んだのです、「**ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしにきたのか**」と。「我々」の中に、わたしたちも数えられているのでしょう。わたしたちに自覚がなくても、**汚れた霊**は、わたしたちも同類であることを、主イエスの前で暴露しているのです。たとえ、わたしたち自身がそれを否定しても。

もちろん、主イエスは、わたしたちを滅ぼすために来られたわけではないでしょう。わたしたちを、「汚れた霊に取りつかれた者」と「聖なる霊に導かれている者」に選り分けられて、「汚れた霊」組は追い出され、「聖なる霊」組だけをパラダイスにお連れくださる、ということではないはずです。ただ、わたしたちの内にある「汚れた霊」を取り除こうとしてくださっている。

「汚れた霊」は、確かに「聖なる霊」と対比させられるものです。「悪霊」にも似ていますが、どこか違うのです。「汚れた」という語は、「カタルシス」という言葉の語源になった語からできています。「カタルシス」は「浄化・排泄」などと訳される用語です。「汚れた」というのは、「浄化されていない・排泄されていない」ということです。端的に言えば、わたしたちの腸に溜まったものが排泄されていない状態を指して使われるのが、「汚れた」と訳されている語なのです。それは、「汚らわしい」とか「穢れ」ということ以上に、「外に出されなければいけないものが、出されずに留まっている」状態にあることです。それが人体であれば、腹痛を催したり、便秘に苦しんだりしている状態が、「汚れた」と言われていることなのです。無理にでも出してしまわなければ、苦しみ続けるしかないのです。

主イエスが出会ってくださることによって頭わになる、わたしたちの内にある「汚れた霊」とは、一体何なのでしょう。

それを問うことよりも先に、主イエスは、「**黙れ、この人から出て行け**」と告げられて、「汚れた霊に取りつかれた男」から「汚れた霊」を出て行かせられました。いいえ、そう告げられる前から、「汚れた霊」はすでに出て行くしかなかったのです。なぜならば、主イエスがその人と出会ってくださったからです。そのひとのことを構い始められたからです。その人が、人との関りを拒み、神とさえ向き合うこともできずに、自分の内に閉じこもり、身内に閉じこもっていることを、主イエスは放っておかれなかったのです。その人と関り、かまって、かまって、向き合われたのです。そうされたならば、もはや、関わらないではいられないでしょう。すでに、その男の内から「汚れた霊」は出て行くしかなかったのです。

主イエスは、安息日の会堂で、礼拝に集う人々と向き合われました。かまってこられました。まず、この姿を、弟子たちにお示しになられたのです。